言語活動の充実に関する研究

京都教育大学大学院　連合教職実践研究科
教職実践専攻　授業力高度化コース
１１６０２６　村林　由香里

言語活動の充実に関する研究

村林　由香里
授業力高度化コース

要約：思考力・判断力・表現力等を育むために言語活動を取り入れた授業の具体化が求められている。本論では、まず言語活動を広義の捉え方と狭義の捉え方に二分し、それぞれに応じた充実のための方策を整理した。次に単元及び授業に言語活動を取り入れる際の留意点を示した。最後に古典の単元を例に言語活動を取り入れた単元構想を提案し、活動の目的の明確化と教科・領域の特性の分析が言語活動の充実につながることを明らかにした。

キーワード：言語活動の充実　古典指導　伝統的な言語文化　単元を貫く言語活動

１．研究の背景

平成 20 年告示の中学校学習指導要領（以下、「現行学習指導要領」とする）に言語活動の充実が明記され、各教科等でその具体化が求められている。国語科では「単元を貫く言語活動」の設定がその充実につながるとされた。しかしながら、諸本に採られた授業実践における「言語活動」の捉え方は一貫性を欠き、「充実」の焦点が定まらない。

「言語活動」とその「充実」とは何を指すのか。その示すところを整理し、「言語活動の充実」という視点から改めて授業を見直し、構想する必要がある。

２．研究の目的

本論の目的は、「言語活動」の捉え方と、その充実のための方策の整理を基に、言語活動を取り入れる際の留意点を明らかにし、「言語活動の充実」について考察することである。

３．研究の方法

「言語活動の充実」が提言されるに至った経緯を答申と報告書案等から振り返ることで、言語活動の捉え方を整理し、その充実のための方策について考察する。その方策を基に、言語活動を位置づけた〔伝統的な言語文化に関する事項〕（古典）の単元構想を提案する。

4.「言語活動」とその「充実」に関する考察

そもそも言語活動とは何か。国語教育研究大辞典[1]は、言語活動を「人間のいろいろな活動のうち、言語による行動・活動」であり、「一般に、聞く、話す、読む、書くの二対四面の活動[2]」であると定義している。国語科はもちろんのこと、学校教育においても長らくこの定義に従って授業が行われてきた。一方、現行学習指導要領が示す「記録・要約・説明・論述等」の具体的な学習活動のことを言語活動とする捉え方も広まりつつある。ここでは、「言語活動の充実」が示されるに至った経緯と背景を振り返り、「言語活動」とその「充実」の捉え方について整理し、「言語活動の充実」について考察する。

4.1 「言語活動の充実」の経緯

2004（平成16）年に文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（以下、「平成16年答申」とする）で「国語力」という用語が取り上げられる。次いで2007（平成19）年に、言語力育成協力者会議から「言語力の育成方策について（報告書案）」（以下、「平成19年報告書案」とする）の報告書が出された。そして「国語力」という用語から、国語力が国語の教科のみで育成する力であるという誤解を招いたことなどに起因し、平成19年の中央教育審議会「審議のまとめ」において、それまで「国語力」としてきた内容を「各教科等における言語活動の充実」という用語で表すに至った。

これらの答申と報告書が出された背景には、価値観の多様化や国際化、情報化など急速に変化する社会の現状、国内外の学力診断テストの結果から明らかになった読解力や記述力の不足などがあり、その背景や課題は現在に至るまで大きく変化はしていない。育むべき力に関しても、論理的思考力や表す力といった「思考力・判断力・表現力等」に通じる力、それら論理的思考を支える感性・情緒、そしてコミュニケーション能力の3点を一貫して見出すことができる。

このように見てくると、平成16年答申・平成19年報告書案をひも解き、「国語力」や「言語力」から「言語活動の充実」の示唆を得ることで、その示すところに迫り得るのではないか。そこで次節では、各答申・報告書案の内容に触れながら「言語活動」の捉え方について確認する。

4.2 答申と報告書案に見る「言語活動」の捉え方

---

[1]国語教育研究所編（1991）『国語教育研究大辞典』明治図書出版

[2]音声言語を媒材とする音声言語活動（聞く・話す）と文字言語を媒材とする文字言語活動（読む・書く）に分類でき、機能的に見ると言語理解活動(聞く・読む)と言語表現活動(話す・書く)に類別できる。この二対四面の言語活動はそれぞれに密接に関係し合っている。

4．2　答申と報告書案に見る「言語活動」の捉え方

ここでは、「国語力」「言語力」等の定義について触れながら、各答申や報告書案の内容を基に言語活動の捉え方を整理する。

平成16年答申の示す「国語力」は、考える力・感じる力・想像する力・表す力から成る言語を中心とした情報を処理・操作する領域と、国語の知識や教養・価値観・感性等の領域から構成される。その中で、前者の領域の四つの力が「具体的な言語活動として発現したものが『聞く』『話す』『読む』『書く』という行為である」としていることから、「聞く」「話す」「読む」「書く」活動を「言語活動」と捉えていることがわかる。

平成19年報告書案では、「言語力」を「知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力」とし、その育成が提言された。言語活動に関しては、「発表する、感想を述べるなどの言語活動」という記述があり、平成16年答申のそれよりもやや具体的な活動を「言語活動」と捉えている。また、「資料や文章を読んで、情報を取り出す、解釈する、熟考・評価して論述するなどのプロセスに必要な技能、それを伸ばすために必要な言語活動について、発達の段階を踏まえて教育内容に適切に位置づけていくことが必要」という記述から、言語活動を手段として捉えて位置づける重要性が示されたこともわかる。

時を同じくして公布された学校教育法の一部改正により、学力の重要な要素として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲、この3つが明確に示された。これを受けて2008（平成20）年に中央教育審議会が答申した「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、改定の重要事項の一つに思考力・判断力・表現力等の育成が挙げられ、それを育むために重要となる学習活動例[3]が示された。

以上の過程を経て2008（平成20）年に学習指導要領が改訂、告示された。言語活動の充実を解説する2011（平成23）年の「言語活動の充実に関する指導事例集」（以下、「指導事例集」とする）では、言語活動を各教科等の目標を実現するための手立てとして、全ての教科等において充実する必要があるとされた。国語科については「社会生活に必要とされる発表、案内、報告、編集、観賞、批評などの言語活動を行う能力」と「課題に応じて必要な文章や資料等を取り上げ、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、相互に思考を

[3] ①体験から感じ取ったことを表現する②事実を正確に理解し伝達する③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする④情報を分析・評価し、論述する⑤課題について構想を立て実践し、評価・改善する⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる、以上6つの活動を例示。

深めたりまとめたりしながら解決していく能力の育成」が指導上の留意点として示され、「言語活動」は平成20年答申で例示された思考力・判断力・表現力等の育成のための学習活動例とほぼ内容を同じくするものとして定位された。

このように「言語活動」の捉え方は徐々に限定的に変容し、今の「記録・要約・説明・論述等」の具体的な学習活動を指すに至った。一方、「言語活動」を「人間のいろいろな活動のうち、言語による行動・活動」といった言葉を介する全ての活動とする考え方も根強く残っているのであろう。この2つの捉え方が混同されたため、「活動あって学びなし」といわれる言語活動や、諸本に採られた実践事例の一貫性のなさにつながったのではないだろうか。そこで、本論ではこれらを区別し、言葉を介する全ての活動とする捉え方と、具体的な学習活動とする捉え方に言語活動を大別することとする。

「言語活動」が二分できたということは、「充実」の方策についても大きく2つの方向性があるとするのは自明といえよう。次節では教育研究文献[4]に採られた実践事例を参考に、大別した言語活動のそれぞれの捉え方に応じた「充実」の方策について考察する。

4.3－1　言語活動の「充実」のための方策　―広義の言語活動―

言語活動を「言葉を介する全ての活動」とする捉え方（以下、「広義の言語活動」とする）に従うと、音読する、発表する、話し合う、考える、考えを書く、自己評価を記述する（学習の振り返りを書く）、メモを取る等が言語活動となる。国語の授業[5]を例に、広義の言語活動を見出すと次のようになる。

表1：広義の言語活動例

授業の流れ	広義の言語活動
題名から「クジラ」に関する発想マップを作り、交流する	発想マップを書く、話し合う、発表する
全文を読み、形式段落の働きや役割を復習する	音読する
接続詞・指示語等に注目し、本文中から問いと答えを探す	考える、ノートにメモを取る
授業の振り返り	振り返りを書く

では、どのようにして広義の言語活動の充実を図るか。まずは、広義の言語活動自体を多く取り入れることであろう。機会を増やすことで、言葉を使った活動に慣れることが期待できる。複数の教科等にわたって同じような形で話し合う活動や書く活動を取り入れる

---

[4]高木展郎編（2008）『各教科等における言語活動の充実』教育開発研究所、水戸部修治編(2011)『言語活動モデル事例集』教育開発研究所

[5] 教材：「クジラの声」（『国語1』平成18年度版、光村図書）

などの工夫をすることで、量的な充実を図ることができる。授業に限って述べるならば、広義の言語活動を取り入れることで、教師の一方的な説明に終始する授業から脱却することもできよう。

次に、広義の言語活動を取り入れる際、ただ書かせたり話させたりすることのないように、何のためにどのような活動を取り入れるかという目的と手段を明らかにすることが重要である。また、コミュニケーション力等の育成のために、ときには相互方向的な活動も意識的に取り入れる必要がある。

授業時には、何についてどのような形でどれだけの時間で活動するかといった指示の徹底や活動班の構成の熟考など、活動環境を整えることが活発な活動につながるといえる。

4．3－2　言語活動の「充実」のための方策　―狭義の言語活動―

言語活動を「記録・要約・説明・論述等の具体的な学習活動」とする捉え方（以下、「狭義の言語活動」とする）に従う場合は、指導事例集にその方策を見ることができる。各教科等の学習においては、ねらいを達成するための手立てとして言語活動を位置づけ、育みたい資質や能力が身についているかどうかを評価する必要がある。

国語科においては、「生徒が自ら学び、課題を解決していくための学習過程を明確化し、単元を貫く言語活動を位置づける」必要があり、言語活動能力自体を育む責もある。また、現行学習指導要領解説が「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力」を身に付けることに資するように言語活動を例示していることから、習得・活用・探究を意識した課題解決型の活動となるように留意しなければならない。着目すべきは、狭義の言語活動が「話す」「書く」という表現活動を含み、表出されたものから読み取りや書きぶり、考えや判断、指導事項の理解度等を見取り、評価するという目的で単元に位置づけられるという点である。また、単元を貫いて位置づけることで、毎時の授業（学習）につながりをもたせることが期待できる。生徒が学習の見通しをもつことができるように単元の導入時に活動内容を予告したり、つながりを意識できるように授業時に声かけを行ったりすることも充実の方策の一つといえよう。

なお、狭義の言語活動は広義の言語活動に内包されるが、本論では「狭義の言語活動」を単元に位置づけられて評価の対象となる記録・要約・説明・論述等の表現活動とし、明確に区別して考えることとする。また、単元に位置づけられて評価の対象となる表現活動が「単元を貫く言語活動」とされていることを鑑みると、狭義の言語活動の中心は「単元を貫く言語活動」であるといえる。

4．4　「言語活動の充実」に関する考察

以上のことを整理し、表２に示す。なお、狭義の言語活動に関しては、指導事例集を参考に国語科における充実の方策を整理することとする。

表２：広義の言語活動と狭義の言語活動

	捉え方	活動形式例	充実の方策
広義の言語活動	言葉を介する全ての活動	音読する、考える、話し合う、メモを取る、考えや感想を書く　等	・目的を明確にする ・言語環境を整える ・機会の量的充実を図る ・相互方向的な言語活動を取り入れる　等
狭義の言語活動	具体的な学習活動(評価の対象となる表現活動を含む)	記録、要約、説明、論述、発表、案内、報告、編集、観賞、批評　等	・指導事項等のねらいを明確にする ・単元を貫いて設定する ・課題解決型の活動にする ・活動予告等で学習過程を学習者に明示する等

本章では、言語活動の捉え方に関して、広義の言語活動と狭義の言語活動の２つに大別した。このどちらかの捉え方、あるいは他に独自に定めた捉え方それぞれに則った言語活動の取り組みは、諸本に見ることができる。

しかしながら、これらを意識的に区別し、それぞれの捉え方に即した方策を取り入れることが「言語活動の充実」につながるのではないか。この考えに基づき、言語活動を取り入れるという視点から授業を見直す際、国語科においては、次に示す単元構想の手順と授業構想時の留意が必要であると考える。

表３：言語活動を位置づける際の留意点

単元構想	授業
①単元の指導事項を定める。 ②指導事項を考慮し、狭義の言語活動を選定する。 ③狭義の言語活動で見取る力を具体化する。 ④指導過程を構築する（毎時の学習が狭義の言語活動に関わるように留意する)。 ⑤表出過程や表出物（成果物）から評価を行う。	・単元導入時に、最終的に行う狭義の言語活動を予告するなどして学習の見通しをもたせる。 ・広義の言語活動を取り入れ、表現活動に慣れさせたり、考えを深めさせたり、メタ認知ができるようにしたりする。

このように見てくると、課題解決型の狭義の言語活動を位置づけた単元構想の中で、広義の言語活動を取り入れることが重要であるといえる。しかしこれは形式に限ったことで

あり、言語活動はあくまで手段であることを忘れてはならない。言語活動が形骸化しないために、思考力・判断力・表現力等が育まれるよう意識することはもちろんのこと、指導事項や言語活動能力が習得できるような課題・発問を設定し、単元によっては情緒や感性・コミュニケーション能力を高めることができるよう単元構想・授業構想を行うことが肝要である。また、単元や毎時の授業において言語活動ないし育成目的が偏向しないためには年間指導計画や設定する課題、延いては主発問の熟考が不可欠である。

このように、狭義の言語活動を位置づけるにあたって、教師は必然的に単元構想を行うこととなる。それは、単元というやや大きな単位の中で毎時の授業の学習課題を考えることになり、つながりのある授業構想を行うことに結びつく。目的や目標を明確に意識することは、授業内容を熟考することにもなることから、言語活動の充実を図ることは、教師の授業構想の際の拠り所としても機能するといえよう。

5．事例検討

本章では、第4章で整理した単元構想時と授業時の留意点に基づいて、単元構想を提案する。具体的には、中学校2年生を対象とした「枕草子」の指導に言語活動を取り入れた単元構想を提案し、考察を行う。その前提として、本章第1節では〔伝統的な言語文化に関する事項〕の指導（古典指導）に関する姿勢や留意点を整理する。

5．1　古典指導について

中学校の古典指導における第一義的な目的は、古典に親しむことであると考える。内容に興味を抱けば、生涯的に自ら古典をひも解くことにもつながるからである。少なくとも生徒が古典に嫌悪感を抱く結果を招いてはならないという考えは至極自然といえよう。現行学習指導要領解説にも、小学校からの系統的な指導を受け、中学校においては「一層古典に親しませるとともに、我が国に長く伝わる言語文化について関心を広げたり深めたりすることを重視して指導する」ことが重要であると示された。では、どのような指導が古典に親しむことにつながるか。現行学習指導要領や先行研究に学びつつ、「親しむ」ことを目的とした古典指導について考察する。

古典指導において、全学年を通して重視されているのが指導事項（ア）に示された音読や朗読である。第2学年では、作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむことが指導事項として示された。音声化することは、歴史的仮名遣いを自然と読めるようになる等の効果が期待でき、多くの実践・実証がなされてきたことは言うまでもない。

高橋（1987）は、朗読や群読といった音声化活動に関して「音声化することをとおして、黙読では気づかなかった内容上や表現上の特徴に気づいていく」ことができるなどの利点をあげ、「主体的学習、創造的学習、集団学習が成立」するものであると述べている[6]。

指導事項（イ）には内容の理解に関わる事項が取り上げられており、第2学年では登場人物や作者の思いなどを想像することが示された。古典作品に息づく人々が自分たちと変わらずに思考し行動した様を想像できたとき、生徒は古典を遠い昔のことと隔てることなく、親しむことができたといえよう。音読と同様に、これらの指導事項も古典に親しむための重要な過程といえる。

ここで、先行研究に学びながら古典教育の意義について立場を明らかにする。飛田（1987）は古典を「古くても今に通ずる価値を保持している言語文化」とし、古典の価値を現代人の感覚で摂取し、個々人の生活意識を高めたり生き方の養いにしたりすることで「人間性の開発に寄与することができる」ことに古典を読む意義を見出している。

一方、時枝（1954）は古典に現代的評価の尺度を持ち込んだり、古典に現代的意義を求めたりすることを否定し、「古典は、今日の自己が形成された所以を明らかにするに必要なものとして教育されなければならない」としている。

古典作品に対する価値の求め方にこそ差異があるものの、最終的に学習者個人の考え方や生き方にかえるという点に古典教育の意義を見出せる。そこで本論では「古典の中にある現代に通じる価値を見出す」という点に着目する。なお「価値」とは、長谷川（1973）がいう「現在の生き方に直接具体的に役立つものではないという認識」に立って捉えることとする。狭義の言語活動は、元来「社会生活に必要とされる」ものという考えに基づいて例示されているが、それら全てがすぐに役立つものとするのはやや性急であろう。長谷川は同書の中で、文学や古典は「心の奥深いところに沈殿していって、やがて現実認識・人間認識の力として再生産される」ものであるとしている。中学校の古典に限っていえば、生涯的に古典をひも解くための入門期的な位置づけであることからも、指導に際して、価値の如何を深く問うよりもむしろ「今に通じる」という感覚に重きを置きたい。これに関して長尾（1984）は現代との関連を安易に求めることを否定しているが、今に通じる事物を考えるとき、生徒は自ずと今と異なる点についても考えるであろう。自分たちに通じるものを見出すことで、生徒が古典に対して親しみをもつことができるのではないかという

---

[6]高橋は、暗唱の際に機械的な読みにならないことに注意する必要性にも言及している。それにも学び、次節の単元構想案では、暗唱テスト等で無理強いせずに自然と指導の中に取り入れることに留意する。

期待から、本論ではこの考えを貫くこととする。

また、大村（1991）は「古典に親しむ」ことを第一の目標とした単元学習の実践を残している。その中で古代和歌の学習の際の留意点として、一首ずつ歌の意味や味わい、価値について理解することだけに集中せずに、「その調べ方、研究のしかたに目をつけ、どんなことを、どんな方法・態度で調べてあるかを知り、研究の態度と方法とを身につけること」に重点をおくことの必要性を述べている。読み方を知ることで、「次の学習へ自ら発展していくことができ、自己活動としての学習がされていくようになる」ためである。このことは古代和歌に限らず、古典指導に総じていえることであろう。古典作品の詳細な解釈は、ともすれば教師主導の授業に終始しかねない。生徒の主体的に読む力を育むためにも、古典の指導の際は、どのように読み解くかといった方法知をも扱う必要があることを学ぶことができる。

このように見てくると、古典の単元構想を考える際には、音読等の音声化活動を取り入れ、指導内容としては第4章4節で述べた指導事項、言語活動能力、情緒や感性等に加えて、古典の学習の仕方に関する方法知が習得できるよう配慮する必要があるといえる。

以上のことに留意して、次節では言語活動を取り入れた単元構想を提案する。

5．2　単元構想案

・対象	中学校第2学年
・教材	「枕草子」（『国語2』平成24年度版、光村図書）
・指導事項	a.音読（伝・国(1)ア(ア)）
	b.例示や描写の効果に着目した文章の理解（読イ）
	c.作者のものの見方や考え方について考え、自分の考えをもつ（伝・国(1)ア(1)、読エ）
・単元目標	『枕草子』を読み、「自分流枕草子」を書く

本単元では指導事項と随筆である作品を考慮し、狭義の言語活動を「随筆を書く」活動と定め、単元を貫いて位置づけた。学習過程を明確にするために、単元導入時や毎時の授業内で「随筆を書く」ことを生徒に意識させるように留意し、最終的に随筆を書くことができるように段階的に課題を設定する。評価に関しては、指導事項・学習目標と表裏一体となる規準を設け、生徒のノートや随筆等から評価を行う。

言語活動に係る学習を中心に単元構想を整理する（表4）。

表４：言語活動を取り入れた「枕草子」の単元構想案

時	学習の流れ（◎狭義の言語活動に係る学習）	広義の言語活動
1	◎五感で四季を感じるものを考える（課題１） ・音読を行い、対訳などから大意をつかむ	音読、ワークシートに書く、 振り返りを書く
2	◎現代に通じる心を考える（課題２）　〈ノート評価〉	音読、ノートに意見を記述、 班内交流、意見発表、振り返りを書く
3	◎心を伝えるために作者が工夫した点を考える （課題３）　〈ノート評価〉	音読、ノートに工夫点を書く、 意見発表、振り返りを書く
4	◎第１・２・３時の課題を参考に随筆を書く	音読、振り返りを書く
5	・随筆を完成させ、班内、学級内で交流する 〈成果物（随筆）評価〉	音読、班内で交流し感想・質問を 述べ合う、意見発表、振り返りを書く

「自分流枕草子」を書く

５．３　単元構想に関する考察

単元の導入時に五感で感じる四季の事物をワークシートに書かせる（課題１）。これは季節感を磨くという点で、感性・情緒に関わる活動である。指導事項 a（音読）に関しては、広義の言語活動として全時に取り入れる。一斉読みやペア読み、一部暗唱、各自が小さな声で音読する微音読、あるいは通読や段落別、原文と訳文を交互に読むなど読み方や読む箇所を変え、飽きさせず、また様々な読み方を知ることができるように計らう。

第２時には、「現代に通じる心を見つけよう」と題し、「枕草子」に表された感性に共感できるところを探す（課題２）。これは、指導事項 c や感性・情緒に関わり、この課題を通して生徒は自ずと本文を熟読し、自分たちと通じる点や異なる点について考えることとなろう。第３時では、指導事項 b に関して、「枕草子」から表現技法や表現の特徴を見出す（課題３）。また、第１時では作者について、第２・３時では「あわれ」「をかし」等古典特有の評価語彙や「つとめて」「炭火」など現代に馴染みの薄い単語を中心に、内容把握及び随筆を書くために不可欠な知識を補うこととする。

本単元構想案では、課題 1～3 を行うことで必然的に随筆を書く過程を経ることができよう。そのため単元導入時や毎時の授業内で、各課題が随筆を書くための事前課題であることを生徒に意識させながら授業を展開する。随筆の評価は、課題 2・3 で考えたことを活かして自分なりの季節感を表せているかどうかを見取る。ここでは「枕草子」の内容や表現の特徴の読み取りを見取ることを目的に単元を貫く言語活動を位置づけたため、成果物の評価の視点は「読むこと」とする。また、コミュニケーション能力の向上の

一助となる班内交流では、付箋の活用や司会者を立てるなど活動形態にも留意したい。

以上が教科及び教材の特性を分析し、それらを活かして活動の目的を明確化した単元構想の具体案である。本単元構想案では、音読や共感することを通して古典に親しみ、各課題の解決を経て古典の読み解き方を体験することが可能である。

6．総合考察

記述力の不足が課題とされ、思考力や判断力、思考・判断したことを表す力（表現力）を育むことが求められている今、表現活動を内包する言語活動が取り上げられるのは理解するに難くない。では、なぜ広義の言語活動のみならず狭義の言語活動を単元に位置づける必要があるのか。見通しをもった学習や課題解決型の学習をさせるためには、テーマや課題を設定し、あらかじめ提示すれば充分である。これは単元学習やテーマ単元といった形で多くの実践が残されている。しかし、あえて狭義の言語活動を位置づけることの意義を考えたとき、それは生徒にとって明確な指針になり得るという点ではないだろうか。例えば和歌の読み取りに際し、古典のテーマ単元に学んで「和歌に表された愛を読み解く」とした場合、読み取り方も、何を以て愛を読み解いたことになるのかも曖昧である。そこを「友達に好きな一首を紹介する」とすれば、「紹介する」という明確な目標ができ、生徒は紹介するという活動の中で必然的に和歌を読み解くことになる。教師はその紹介文なり紹介スピーチなりから、和歌に詠まれた心を読み取れているかどうかを評価する。教師にとって言語活動はつけたい力を育むための手段であるが、生徒にとっては明確な目的となり得る。その明確さが狭義の言語活動を設定する効果の一つといえる。だからこそ狭義の言語活動には明確な「話す」「書く」という言語表現活動が含まれるのであろう。

様々にある言語活動の捉え方の違いに関わらず共通していえることは、明確な目的をもって位置づける必要があるということだ。明確な目的とは、指導事項のような直接的で短期的なものもあれば、表現活動に慣れさせるといった長期的なものもあり、学級内での発表の前段階として班内で発表する機会を設けるというような間接的なものも考えられる。いずれにしても授業時に限っていえば、教師と生徒が目的を共有することは、毎時の授業における学習につながりをもたせることに結び付く。ひとつの文章を数日にわたって学習したり、長期的・螺旋的に構成されたりする国語の授業においては、目指すべき目標をもって学ぶことが学習意欲の向上にもつながるといえる。折しも、学習意欲が学力の重要な要素の一つとして定位された。学習意欲の喚起のためにも、狭義の言語活動を位置づける

にあたり、生徒の興味をひくような課題を設定することが望ましい。

また、教科・領域延いては単元や教材の特性を分析する必要があることは言うまでもない。言語活動の形骸化を避けるためにも、指導事項や位置づけの際の手順だけにとらわれてはならない。広義の言語活動と狭義の言語活動を明確に区別し、それぞれの充実のための方策に則り、教科・領域等の特性の分析を経て位置づけられて初めて「言語活動」は「充実」するといえる。手段や目的、その効果をも明確に意識して言語活動を取り入れることで、言葉を通して学ぶということが質的にも量的にも保証されるように計らいたい。

7．研究の成果と今後の課題

本論では、言語活動の捉え方を二分し、それぞれの充実の方策について整理した。また、言語活動を取り入れる際の留意点を示し、〔伝統的な言語文化に関する事項〕の指導を例に言語活動を位置づけた単元構想を提案した。以上のことから、「言語活動」の捉え方を明確に区別し、それぞれの活動の目的を確かめることと、教科・領域の特性を分析した上で言語活動を位置づけることが「言語活動の充実」につながることを明らかにした。このことは国語科に限らず、全ての教科・領域での取り組みに資するものであると考える。

今後、各教科・領域の特性、単元、教材、生徒の実態等を分析し、言語活動を位置づけ、その適切性や有用性について更なる実践・検証を重ねていくことが課題である。

引用文献

1）大村はま(1991)大村はま国語教室 3、筑摩書房、p.15.16

2）言語力育成協力者会議(2007)言語力の育成方策について(報告書案)【修正案・反映版】p.1.3.10.

3）中央教育審議会答申(2008)幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について p.25

4）中央教育審議会答申(2011)言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成にむけて～p.11

5）飛田多喜雄、野地潤家監修(1993)国語教育基本論文集成 17、明治図書出版、p.289.290.252.350.432

6）文化審議会答申(2004)これからの時代に求められる国語力について、p.7

7）文部科学省(2000)中学校学習指導要領解説国語編、p.7.22